

○大林冷子 土井千鶴子\* 中川早苗\*\*

(芦屋女子短大 \*姫路工大 \*\*奈良女大)

目的 着装によって生起する快活さ意識の構造を明らかにし、快活さ意識尺度を作成するとともに、前報の恥ずかしさ意識の場合と比較検討する。同時にこれらの意識と服装行動との関連についても検討する。

方法 まず自由記述法により、女子学生を対象に「快活さを生起する服装」について意見の収集を行い、整理・分類して40種の服装を選定した。この40種の服装についての質問項目をもとに予備調査を行い、因子分析によって快活さ意識測定尺度を作成した。次に419名の女子学生を対象に、今回作成した快活さ意識尺度20項目、およびこれと合わせて恥ずかしさ意識尺度20項目、おしゃれ志向尺度15項目、感性尺度20項目、好みの服装16項目を質問項目として本調査を行い、5段階で評定を求めた。調査時期は1999年12月である。分析には相関分析の方法を用いた。同時に調査対象者の快活さ意識項目の合計得点を求め、得点数の高・低グループ間で服装行動に違いがあるかをみるためt検定を行った。

結果 予備調査の結果を因子分析し、4項目ずつ5因子(合計20項目)の快活さ意識測定尺度を作成した。本調査の相関分析結果では、着装によって生起する快活さ意識は恥ずかしさ意識と正の相関が認められ、快活さ意識項目の合計得点が高いほど恥ずかしさ意識が高くなる傾向が認められた。なお、おしゃれ志向尺度と感性尺度との間には特に高い正の相関が認められた。また、快活さ意識項目の合計得点が高いグループは低いグループに比べ、暖色系の、個性的な、ファッションナブルな、ブランドの、明るい色の、大胆な、派手な、女性的な、大人っぽい服装を好む傾向が認められた。